

## 故梶村秀樹教授追悼号の発行によせて

梶村秀樹教授が最も敬愛し、かつ真剣に学んだに違いない神奈川大学二部（夜間部）学生のOB諸君が発行している「無方」という同人紙がある。それは、十五年ほど前のあの大学闘争時代に、二部生の学ぶ権利を主張したがゆえに、逮捕されたり、刑務所に送られた学生、その救援活動にたずさわった学生、二部魂を継承する後輩たちが中心になって発行している、手づくり不定期刊行の小さな新聞である。残念なことだが、この新聞に登場しうるような上等な「神奈川大学教授」は、おそらく、梶村秀樹（経済学部）、向井俊二（外国語学部）の両先生くらいでしょう。

一九九〇年五月十二日発行の「無方」第19号は、「5・29逝去一ケ年 梶村秀樹先生追悼」を巻頭に掲げ、在りし日の梶村教授の写真と、白基琬作詞、キム・ジョンニユル作曲の「ニムのための行進曲」を掲載している。また同号には、梶村秀樹に生あらばかならず参加したであろう「がんばれ大韓の娘たち 1990・4・6韓国スミダ労働組合を支援する神奈川連絡会議結成集会」のことがコメントなしで掲載されている。

一九八七年のことだが、超過密スケジュールに追いまくられる梶村教授に、「仕事を整理せよ、あれこれ頼まれても断れ、梶村朝鮮史学を集成せよ」などと高圧的に述べて、彼に眼鏡ごしの無言の批判をあびて、沈黙したことがある。発病した一九八八年九月以来、三度目の入院中の梶村教授を見舞うため、一九八九年五月十三日、間宮陽介（経済学部）とともに、稲城市民病院を訪れた。梶村さんは、「頭はしっかりしているんだが、体が動かない」といい、講義や梶村ゼミの後事を私に託した。

院生からの病状報告に一喜一憂しているうちに、ついに五月二八日深夜、新納 豊（大東文化大学）から「先生危篤」との電話がはいった。池上和夫（経済学部）とともに、稲城市民病院に急いだ。梶村ゼミの神奈川大学、東京大学、一橋大学の院生、富岡倍雄教授夫妻（経済学部）などがぞくぞくかけつけた。深夜の病院の待合室で、院生諸君と缶ビールを飲みながら、「梶さんが顔をだしたなら、凄いセミナーになるな、楽しいコンパになるな」などという絵空事を考え、ただただ彼の死を待つことの辛かったこと、辛かったこと。五月二九日、その生涯において、「最小の迷惑」と「最大の至福」を支出しつづけた志操の人、梶村秀樹は死んだ。梶村秀樹らしい死であったと思う。

梶村秀樹教授の一周忌を目標に、彼が育てた神奈川大学大学院各国経済研究室のスタッフと出身者・関係者の論稿、ならびに梶村教授自身の未発表遺稿を集めて、追悼号を公刊することになった。皆多忙のため、発行の期日も遅れ、若干の諸君の論文は間にあわなかったが、ともかく完成した。なお、追悼号に掲載した金 鳥天氏の論文は、原論文を若干圧縮したものである。圧縮の作業には、指導教授川上幸一氏の了解をえて、在韩国の金氏に代わり、伊藤 修（経済学部）があたった。また梶村論文の校正は、吉野 誠（東海大学）が担当した。

梶村秀樹教授の年譜と仕事のリストは省いた。彼の年譜と社会的活動については、『追悼梶村秀樹さん』故梶村秀樹先生をしのぶ市民の集い実行委員会刊、一九八九年十一月一日、『梶村秀樹著作集別巻 回想と遺文』明石書店、一九九〇年五月三〇日、をみられたい。彼の研究遺産については、一九九〇年十二月から刊行予定の『梶村秀樹著作集』全六巻（第一巻 朝鮮史と日本人、第二巻 朝鮮史の方法、第三巻 近代朝鮮社会経済論、第四巻 朝鮮近代の民衆運動、第五巻 現代朝鮮への視座、第六巻 在日朝鮮人論）をお読みいただきたい。

私事にわたるが、一九八三年八月～九月、私は大崎平八郎氏（横浜国立大学名誉教授、神奈川大学講師）を団長とする訪ソ経済視察団の一員として、ソ連各地の農場や工場、学術機関を訪問したことがある。モスクワ滞在中、どこで聞

きつけたのか、日本の社会学者が大勢来ているということで、朝鮮近代史を専攻しているという博士候補論文（修士論文に相当）準備中のロシアの若手研究者がカナザワ大学の先生を探しにきた。用件は、「自分は朝鮮語でカジムラ教授・博士の論文をいくつか読んだことがある、日本語はできないが、カジムラ教授とコンタクトをとりたい、博士の知り合いはいないか」ということであった。団員のなかにカナガワ大学の中村がいた。

私は、梶村教授の友人・同僚のカナガワ大学教授であること、「梶村教授は朝鮮語に翻訳されていない沢山の優れた論文を書いている世界最高の学者であり、日本は朝鮮近代研究でかなりの蓄積をもっているので日本語を勉強するように」といったことを彼と話した。このアスピラント（大学院生に相当）から名刺をもらったが、帰国してトランクを調べたところ名刺は紛失していた。大学で梶村さんにこの話をし、例の中村のずさんさでソ連の若手研究者がナノ太郎ベイか分からないが、ロシアから手紙がきたらよろしく頼む、と話したことがある。早く死に過ぎた梶村さん。中村は二一世紀過ぎまで生きる予定であるが、梶村さんに五年ほど命を分けてあげ、あのロシアの若手研究者と梶村さんとの朝鮮をめぐる討論を聞きたかった。

ペンを置くときがきた。東アジアの中天に輝きつづけるであろう人民の星、梶村一等星に報告したい。神奈川県は、第二外国語として朝鮮語の開設を決定した。来年度以降入学する経済学部生のかかなりの者が朝鮮と朝鮮語を学ぶにちがいない。神奈川県から、第二、第三の梶村秀樹がかならず生まれるであろう。

最後になったが、ここに掲載する写真は、一九八九年六月、偉大な市民梶村秀樹の死を悼み、その志をつぐ学生諸君が、神奈川県八号館一階の廊下の壁に書き記した文字である。醜悪なベルリンの壁の破片とは正反対の意味をもつ、日本の貴重な「良心のあかし」でもある。いつまでも消さないでほしいものだ。



神奈川県立大学8号館1階